



教職大学院 Newsletter

No. 44

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2012.06.23

「修士レベル化」をどう進めるか

中教審教員の資質能力向上特別部会委員
北海道教育大学名誉教授
村山 紀昭

2年近くの議論を経て、中教審の教員の資質能力向上に関する答申案がまとめられました。私も、福井大学の松木先生などと一緒に成案作成に関わりました。

答申案のポイントは、日本の小中高の教師の基礎資格を修士レベルに引き上げることにあります。これは、戦後すぐの、大学における教員養成原則の導入以来の大改革と言っているでしょう。

しかし、小中高で100万人に及ぶ教員層を一挙に修士化することは、簡単ではありません。修士レベル化を基本方向として見定めながら、これを現実的にどう追求していくか…。ここに答申案の最終まとめ段階の苦心がありました。

第1に、資質能力向上のために修士レベル化がぜひとも必要であることについて、まだまだ関係者の認識が共有化されていません。とくに、教育委員会・学校と大学の双方、さらには最大の当事者である教師自身がこの点について大いに議論する必要があります。

第2に、修士レベル化のための教育体制を抜本的に整備していかなければなりません。これは容易ならない課題です。量的にみると、小中高等の新規教員採用者数約3万人に対して、現在の教職大学院の入学定員830人、国立教員養成系教育学研究科の入学定員3,333人、国立一般大学院専修免許状取得者3,000人、同公立350人、同私立3,500人の計1万人強でしかありません(平成23年度)。

この点で、答申案は、教職大学院を中心に修士レベル化を進めることを明記するとともに、既存の教育学研究科の大幅見直し、国公私の大胆な連携など踏み込んだ提案を行っています。これにど

う応えるか…。とくに国立の教員養成大学・学部にとって大きな試練になるでしょう。

第3に、修士レベル化といっても、ただ修士の学位を取れるようにすればいいわけではありません。どのようなコースによりどのような資質能力を得られるようにするかの内実が大事です。この点でも、答申案は、理論と実践の往還と実践の振り返りを学校を拠点にして行う福井大学などの「学校拠点方式」の重要性を指摘しています。量的整備と併せて、こうした内実づくりも同時に進めていかなければなりません。

修士レベル化の本格議論はこれからです。上記の諸論点について、この間の教職大学院での実際を基にした堅実な議論が大事だと考えています。この点で、いち早く学校拠点方式を打ち出してきた福井大学で、答申案発表後最初に全国の参加者を含めて修士レベル化について討論されることは非常に有意義です。今回のラウンドテーブルが、教員の資質能力向上と修士レベル化の挑戦への新たな議論の出発点になることを大いに期待しています。

内容

「修士レベル化」をどう進めるか (1)
福井大学教育地域科学部附属中学校
第47回教育研究集会に参加して (2)
5月合同カンファレンスを終えて (4)
院生自己紹介 (7)
福井大学教職大学院 平成25年度入学生募集 (13)
福井ラウンドテーブルのご案内 (14)

福井大学教育地域科学部附属中学校 第47回教育研究集会に参加して

子どもの思考のつながりを見ていく

スクールリーダー養成コース2年
越前市武生第一中学校
澤崎 秀之

授業参観の前にオリエンテーションがあり、“子どもの筋で授業を見る（子どもの思考のつながりを見ていく）”という示唆をいただいたので、そのつもりで2つの公開授業を参観させていただいた。私が参観させていただいたのは2年生と3年生の数学。まずは2年生の数学で、本時は自分たちが作成した問題を分類していくのであるが、分類する際の理由や視点を生徒たちが話し合いながら学習を進めていく場面の授業であった。私はある班の生徒の思考を見取るつもりでいたのだが、大変興味深い場面に遭遇した。男子2人と女子3人の班で、班での活動が別々の流れで始まってしまった。女子3人は本時の授業の目標の通り、着々と分類を進めていくのだが、男子2人はその流れには乗らず、1人の生徒の疑問にもう1人の生徒が丁寧に答えているのである。もちろん分類の課題には参加できず、しばらくは別々の学習活動になっていた。女子と男子のどちらの生徒の思考の流れもよく見て取れるのだが、1つの班としてどうまとめていくのかハラハラドキドキしながら興味深く観察していた。すると、参観者の私にはお互いが別々に相手のことなど気にせず、自分たちの流れに集中していたと見えていた男女が、お互いの進み具合を耳で聞いていたのか、さりげなく女子の1人が「ねえ、どんな仲間分けしてるの？」と声をかけた。すると男子も「他の班のみんなとは同じような分類ではなくて…」と返し始めた。「それも面白いね。画用紙に分類を書いてみたら？」、「解き方が分からなかったから、教えてもらったら問題の意味が分かってきた！」などなど、瞬く間に1つの学習の流れにまとめられ、別々の学習の流れで進めてきているように見えた筋が、一つの班の中でつなげられ、共有されたのである。普段私が授業をしている際にはここまでの生徒の思考の流れは見取ることができていない。今日こうしてじっくりと1つの班の学習の流れを観察することができたからこそ知り得た“生徒の思考の筋”であった。

また、3年生の数学でも大変興味深い場面に遭遇した。授業者の先生が実に巧に張り巡らせた縦

と横の糸の中を生徒たちが生き生きと学びを広げていく。途中で間違っただけで5人が困っている。それは間違っているとは思っている、どうやってそれが間違っているのかを確かめる方法を5人が持ち合わせていなかったからである。その発見は「まあ、いいか。違ってそうだし。」と、一度お蔵入りした。授業の流れが進む中で、参観していた私や他の参観者の先生方も、その間違いは今日の授業の本質に迫るとてもよい発見で何とか生徒がもう一度、考えてくれないかなあと思っていた。そうこうするうちに、別の発見をする中で、先ほどの間違っただけで考え方を説明できそうな場面が出てきた。1人の生徒が「さっきのこれって、こうするんかなあ？」と。待ってました！授業をデザインした先生の学びの筋に生徒の学びの筋がフィットしたような感覚を覚えた。生徒の学びの筋は本当に多種多様で、決して同じではないが、学習を進めていく中で話し合い、学び合い、深め合いながら、共有化され、その時間の学習の筋が出来上がっていく。一見、授業者の意図とは違ったところで進められていると思った生徒の思考が、ものの見事に“必然性のある流れ”としてまとめられた。

私自身が授業をしていてよく反省していることなのだが、恥ずかしながら1年間の中で今日は授業がうまくいったと思える瞬間はほとんど無い。それは、授業者の私自身が頭の中で描いた授業のデザインや筋が、生徒の学びの筋とうまくマッチすることがなかなか無いからである。1人ひとりの思考と班の中での共有化、さらには班からクラスでの共有化など、こうして参観させてもらえないと、気付かない視点がよくある。本当によい場面に遭遇できたことに感謝している。必然性のある授業をデザインされたお2人の先生方のおかげで、生徒の様々な思考の流れを見取ることができ、朝のオリエンテーションで示唆していただいた“子どもの筋で授業を見る”ことの大切さを体験できた有意義な1日であった。

今後は、内発的な学習の動機付けの原因を数多く見出し、帰納的な考えに基づき、個々の子ども

の反応を予想したうえで、意図的に内発的な学習の動機付けを図る授業を実践していくことが目標です。特に、原因の中に潜んでいる本校の「隠れたカリキュラム」を顕在化することは、教科セン

ター方式における環境づくりにおいて必要不可欠なことであるとの強い認識をもって取り組んでまいりたいと思います。

**教職専門性開発コース1年
福井市中藤小学校インターン
後藤 歩実**

学部時代にも附属中学校の研究集会に参加する機会は何回かあったのですが、今回の研究集会は私自身これまでに参加したどの研究集会よりも子どもの学びに沿った視点で参加することができたと感じています。それはやはりインターンシップにおいて日々実践し、子どもの学びを見取る視点が養われてきたこと、また附属中学校にインターンシップにいらしている院生から附属中学校の研究の話を知っていることによって、附属中学校の研究の流れを理解した上で研究集会に参加することができたからだと思います。

授業参観では、保健の授業と保健体育のダンスの授業を参観させていただきました。その中でも特に印象的な場面があったので紹介させていただきます。

保健の授業で、「健康プロデューサーになろう！」という単元目標でした。前時まではAさんという第三者の生活習慣と健康の関係について調べたり、話し合ったりして生活習慣の問題が健康問題へと繋がる過程やそれを改善するための対策をグループで考えていました。そこから自分の生活を振り返り、健康課題を見つけ、改善策をたて実践してみるという取り組みを経て、本時では実践したことの評価と振り返りを班ごとに行っていました。

ある班の振り返りを聞いているとみんな自分の改善策に対して現実的に自分の性格や生活と照らし合わせて評価することができていました。その中でも野菜の嫌いな女の子が「野菜を食べる」という改善策においてサラダを食べた日の評価は低いものに対して、カレーに野菜をたくさん入れた日の評価は高く、感想にも「嫌いなものも好きなものと組み合わせると美味しく食べることができた。」と書いていました。その評価の報告を受けて、班の生徒たちは『健康課題を改善するために

嫌いなこと辛いことを頑張っている』という意識ではなく、『どうやったら、よりよい生活が送れるように生活習慣の課題を工夫して改善できるか』ということに着目するようになりました。そのため、その女の子の発表の後は「漫画が好きなら、腹筋と組み合わせてみたら?」「無理に食事の回数を減らさなくても、1回に食べる量を少し減らせば良いんじゃない?」というように、効果はもちろん報告者の生活習慣の課題に対して、その人の生活や性格に合わせた継続可能な改善策を考えることが出来ていました。また、「野菜を食べる」と改善策に書いていた女の子もその取り組みが班の中で評価されたことにより、最終的には「野菜を美味しく食べられるように工夫する」という改善策に変わっていました。個人での振り返りでは見えなかった視点が班での振り返りではうまれ、班のメンバー全員の思考が深まったことを感じました。

本塚先生の前時までの授業の流れから、生徒が『授業のためにやらなければならない』という意識ではなく、『自分自身の健康のため』という意識を持って取り組んでいることが授業を参観しても伝わってきました。だからこそ、生徒の思考により添って参観したときに協働する生徒を見ることができたのだと思います。

全体会、シンポジウムにおいても、これまでに研究集会に参加した時にはよく理解しきれなかった授業と結びつきを感じながら聞くことができました。そこで改めて、目の前の子どもの姿を見取った上で研究がなりたち、そのことを踏まえた授業実践の重要性を感じました。インターンシップも始まって2ヶ月が立ちます。これからも積極的に他校の研究に触れ、私自身の実践に生かしていきたいと思います。

本日は貴重な体験をありがとうございました。

**教職専門性開発コース1年
福井大学教育地域科学部附属小学校インターン
北村 元輝**

教育地域科学部附属中学校第47回教育研究集会に参加させていただきました。学部時代を含め4回目の研究集会でしたが、今回ほど私の学びにつながったと感じた研究集会はありません。その大きな要因として、教職大学院に入学し、日々のイ

ンターンシップの中で自然と授業参観の視点が養われているからだと考えています。また「授業のここをみよう」という自分自身の問題意識が明確化されていたことも要因として考えられます。

公開授業では、2つとも社会科について参観さ

せていただきました。森田先生、塚田先生には学部時代の教育実習で非常にお世話になり、先生方の授業を参観できることをとても楽しみにしていました。森田先生の授業はTPPを教材として、効率と公正の観点から自分たちの生活に関わる問題として合意形成を行っていくものでした。まず班でTPPについて「農業」「企業」「貿易」「国民」の4つの視点のうちいずれか1つの視点から賛成か反対かを考えていきました。その後視点の違うメンバー間で意見交流を行い、TPPについて多面的な理解を通して、合意形成、意思決定をしていく活動がありました。私は森田先生の授業を通して一人の生徒の学びを追っていました。その生徒は授業開始時TPPについて反対の立場を取っていたが、他の班のメンバーと意見交流をしていく中で、自分の考えの限定性に気付き、疑問を感じ始めていきました。彼は授業の終盤になるとTPPに対して「やや反対」という立場に変化していました。その生徒の様子を追っていくと、周りの生徒の考えを受け止め、自分の考えと照らし合わせながら自身の考えを精緻化していくことができていたように感じました。

塚田先生の授業は今年度から新しく組み込まれたアフリカ州の学習について、地域的特色を探りながら課題把握をしていく内容でした。授業の中心となる活動として、アフリカについての事実について子どもたちが付箋に書き出したものを相互関連的に捉え、矢印でつないでいくことで「マップ」を作っていく班活動が行われていました。個人の理解であった各事実が、マップを作っていく過程において繋がりがあうことで、アフリカに対する子どもたちの多面的な視点からの理解へと変化していったように感じました。また作成したマッ

プから事実間の矛盾を見つけ出し、塚田先生の言う「わくわくする疑問」として調査課題として設定することで、これからの学習を見通すことにも繋がっていたようにも思いました。

森田先生、塚田先生の授業を続けて参観させていただいたことで、附属中学校が考える「学び＝教育的に価値のある子どもの変容」を目の前の生徒たちで感じることができたように思います。もちろん中学3年生と中学1年生という発達・学習段階による変容の質の違いはありますが、他者の考えに触れることで自身の考えが揺さぶられ、そこから考えを再構築していく過程がお二方の授業には組み込まれていたように思います。1時間での変容、単元での変容、学年での変容、3年間での変容と連続性を持たせることで子どもたちの学びが大きくなるように感じました。

最後にお二方の授業を参観させていただくのは今回が初めてではなく、研究集会や教育実習中などこれまでもありました。しかし学部時代は社会科という教科の視点から「子どもの学びに必然性を持たせるためにどういう手立てを設けているか」「単元（本時）の目標を達成するために教師はどう働きかけているか」と考え、授業を参観させていただいていました。しかし今回は普通のインターンシップで大切にしている「子どもたちの思考から授業をみる」という視点で授業を参観することができていたように思います。先生方の授業を授業者として、また授業を受ける子どもとして参観することができたのは、日々のインターンシップがあるからだと感じています。まだ数ヶ月ですが、現場に入り学んでいくことの意味を感じることができました。

5月合同カンファレンスを終えて

学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望を拓く

スクールリーダー養成コース2年
高浜町青郷小学校
朽木 史昌

風薫るさわやかな気候の中、5月の合同カンファレンスが実施された。4月のカンファレンスとは異なり、緊張感が解けゆったりとした時間が流れていくのが実感できる。今回は院生が所属するそれぞれの学校での協働研究の現状について小

グループで語り合い捉え直すことで今後の展望を拓くための時間を持った。「語り合うこと」そして「聴いてもらえること」の心地よさやそこから生まれる安心感については、昨年来感じていたことであったが、一歩進めて自分自身の実践につい

て「捉え直すこと」の重要性について改めて考える時間が持てたと思う。

オリエンテーションでは、まず柳澤先生より旧来の大学院での学びと学校拠点方式を採用している教職大学院での学びと違いから、新しいコミュニティとして出発するにあたり現状を見極めることの大切さについて話をお聞きした。次に、鈴木三千弥先生から至民中学校における教師の協働について、授業づくり、学級づくりの面から話をお聞きした。至民中学校では、教科センター方式を採用し日常的に授業公開がなされているだけでなく、即興的な教科会を開いている。その上、教科を超えた協働も展開されている。そして、TT、特別支援学級の担任とのかかわりを通し、複数で子どもたちを見ていく取り組みが行われている。至民中学校発足時のことを知る人が少なくなり、そのコンセプトを語り継いでいくことが必要だと感じておられるが、新しいスタッフで出発することをプラスに捉え新（進・深・真・信）至民中学校づくりに取り組んでいこうとする熱い思いが伝わってきた。

その後、小グループに分かれて「協働研究の現状を交流する」語り合いの場を持った。3名の院生がそれぞれの職場における現状や課題、悩み等を語り、大学院の先生お2人を含めたグループのメンバーが同じ職場にいるかのようにその語りを聴き、それぞれの立場から思いを語る。まさに濃密な時間が流れていくのが感じられる。

協働研究を支える側である立場にある院生からは、高いレベルでの専門性・経験・人間性が求められる職場においてその力量形成に向けて取り組んでおられる自主的な研修「学びの会」について

の話をお聞きした。特に印象に残ったのは、研修をどう組み立てていくかという互いの実践を語り、その実践から学ぶことが大切であり、それが協働を支える立場にあるものの質にかかわってくるということである。既存のスタイルを追従することなくコーディネーターとしての専門性を高めるために新たな取り組みを協働して日々模索しておられる現状がよくわかった。

最後に、授業研究を通して教師の授業力向上に取り組んでいる青郷小学校の現状について語る時間をいただいた。グループの先生方からは、「いい授業とは?」、「わかる授業とは?」といった話題をはじめ、「子どもの学び」と「教授（指導）」は独立した存在ではなく切り離して考えていくべきではないということや授業者の思い・考えは子どもの姿を通して語ることができるのであり、授業の中の具体的な状況、事実を大切にしていかなければならないなどの話をお聞きした。授業づくりや授業研究会について改めて捉え直す機会を持つと共に青郷小学校が新たなサイクルに入ってきたことを実感することができた。授業公開をしていくことの必要性が認識され、職員間で共有できている現状からさらに進めて、今後は、授業の価値観について語り合うことや授業観の違いを認め合えるような関係をつくること、そして共通の課題で話し合えるような授業研究会にしていくことが大切であると思う。

学校が新しいスタッフでスタートしたこの時期に、現状を捉え直すための話し合いの場が持てたことに感謝し、協働研究、授業実践をさらに進めていきたいと思う。

教職専門性開発コース2年 福井県立藤島高等学校インターン 前田 恵子

今回のカンファレンスは、予備日程で参加し、院生7名と大学の先生方3名の計10名のカンファレンスとなった。福井大学が学校祭のため、AOSSAが会場となり、いつもとは違う雰囲気の中で行われた。少人数でのカンファレンスではあったが、4月とは一味違う、先生方の熱気とやる気で溢れ、時間いっぱいまで話は尽きない様子であった。

「学校での協働研究の現状を踏まえて、これからの展望をひらく」というテーマで、オリエンテーションと5人ずつのセッション（語り合い）が展開された。

最初のオリエンテーションでは、濱口先生からある人物の記録の中から抜粋した言葉が複数枚提示され、それらの言葉からどんな人物なのか、どんな性格なのか、どんな気持ちなのかを考えていった。人物は目の前には見えないが、使われてい

る言葉の表現方法やイメージから想像を膨らませていく。自分自身の姿と照らし合わせたり、身の回りにいる人と照らし合わせたりしながら考えていた。全員で考え、思いつくままに答えを言い合っていたのだが、スクールリーダーの先生方の回答が印象的であった。『!』や微妙な表現に着目して、推察されていた。私は思いもつかなかったため、新しい視点を得られ、非常におもしろい経験ができた時間であった。様々な思いがそれぞれにあるだろうが、悩んでいるのは一人ではない。悩みが異なっても、共有できる想いはある。カンファレンスで集まる人は様々だが、どの方も4月になって新たな環境になっているはずである。今年度が始まって2ヶ月が経つ今、学校の現状を自分自身がどう捉え、これからをどうデザインしていくか、カンファレンスを通して、話しながら考えていこうという趣旨であった。

普段の会場とは違うカンファレンスで、しかも少人数という環境により少し堅かった空気が、オリエンテーションにより打ち解けられたのちに、セッションが行われた。自己紹介を兼ねながら、自分の学校における現在の状況や悩みを話し、広げていった。主にスクールリーダーの先生方の話が主となったが、インターンシップの経験があることで、私自身も自分の抱える課題と照らし合わせながら考えることができた。

中でも、プロジェクト型学習の話になった時、私の頭に浮かんだのは、今かかわっている生徒の姿であった。受験科目の授業では、生徒曰く「追い詰められている」、「緊張状態」という状況にあるらしい。そのような授業カリキュラムの中にあるプロジェクト型学習は、生徒にとって「息抜き」の時間だという。私は昨年度のインターンシップで、1年間自分たちの好きな課題で研究できるプロジェクト型学習のおもしろさを強く感じ、今年度はこの授業こそ力を入れ、生徒の頭をどんどん使った授業展開をしていきたいと考えていた。しかし、今年度が始まり、いざ授業となると、生徒の意欲はあまり高くなく、ふわふわとした生徒の姿が目についた。“なんでこの楽しそうな授業に興味を沸かないのだろうか、ちゃんとや

ればできる子たちなのに、なんでやらないのだろうか。”そんな思いが生まれ始めていた。そんな時に、生徒が「この授業って来年はないんだよね？これなかったら体育しか生き抜けるとこないじゃん」、「毎日毎日、疲れちゃうよね」という会話を繰り返して聞いていた。この会話を聞いて、はっとした。生徒たちは真面目にやっていないのではなく、どの時間も真面目にやっているからこそ、この時間は他の生徒と話をし、他愛もない話をし、彼らなりに考えてうまく調節しているのだ。ここで、ぎっちりぎっちり真面目にやりなさい！と強要しては何の価値もなくなってしまふ。息を抜きつつも互いに話をし、少しずつ研究を進めていくやり方が、この学校の中で彼らが向き合った結果なのだと感じた。

教師は授業に対して何を求め、生徒と一緒に進んでいくにはどのような手立てが必要なのかを考えつつ、授業に取り組みなければならぬと感じた。この授業は何をどこまで求め、探っていくのだろうか。これから考えていくべき課題が、今回のカンファレンスによって明確になった。この1年間もまた充実したものになるだろうと、先が広がったカンファレンスとなった。

**教職専門性開発コース1年
福井大学教育地域科学部附属中学校インターン
筏井 紀代美**

爽やかな風の吹く5月19日、5月の合同カンファレンスが行われました。私は4月の合同カンファレンスは予備日程で参加していたので、正規の日程での合同カンファレンスは今回が初めてでした。多くの先生方や院生が集まる場に、最初は多少緊張していましたが、そうした緊張はすぐに解けることとなりました。

至民中の鈴木先生によるオリエンテーションは、親しみやすい語り口で聞きやすいものでありながら、学級や教科など様々なテーマについての現状が語られる、大変中身の濃いものでした。合同カンファレンスには地域や校種等を超えて、様々な学校に勤務しておられる先生方がいらっしゃいますが、そうした先生方のお話を伺うことで、「自分の今の学校ではどうだろう」と、自分の学校と重ね合わせて考えることができます。そうすると、自分の学校を一步引いた客観的な視点で見つめ直すことができます。このことは大変貴重な学びである、と感じることができました。

グループでの交流の際には、地域や保護者の話、メンターとインターンの関係性、「自分の基準」を持つことの重要性、特別支援学校において

のICF的な考え方など、様々な話題が出ました。中でも特に印象に残ったのは「自分の基準」を持つことの重要性についてです。これは、メンターとインターンの関係性ということにもつながっています。インターンはメンターの先生をはじめとして、様々な先生方から様々なことを学べけれども、その先生の「コピー」になってしまっただけいけないということ、「自分の基準」を持って子どもと関わらなければいけないということを学びました。その他にも貴重なお話をたくさん伺うことができ、これからのインターンに向けての不安感が少し和らぎ、活力が得られたように感じられました。

合同カンファレンスという場合は、決して普段のインターンシップから切り離されているわけではなく、インターンシップの延長線上にあるということを実感できた1日でした。

院生自己紹介

福井大学教育地域科学部附属中学校

奥村 栄司郎 おくむら えいしろう

本年度から教職大学院に入学させていただいた奥村栄司郎です。昨年度も集中講座を受講したり、ラウンドテーブルで実践報告をしたりと何度か教職大学院の集まりに参加させていただいたので、5月のクロスセッションで「昨年もしらっしゃいませんか」と声をかけていただき、皆さんの仲間に入れたことがちょっと嬉しくもあり、恥ずかしくもありといった気持ちでいます。

勤務させていただいている福井大学教育地域科学部附属中学校（以下附属中）は義務教育校、教育実習校、教育研究校の3つの使命を持った学校です。特に教育研究校としてこれからの社会を見据えた学校づくりを目指し、学びを拓く《探究するコミュニティ》をテーマに、長年にわたり探究とコミュニケーションを核とした授業研究に取り組んでいます。授業における子どもの協働はもちろんですが、教師の学びもフラクタルな関係であるという考えから、教師も協働で学び、研究を進めているところが特徴であると感じています。私はその中で技術科を担当し、探究を核とした実践を積み重ねようと、前任者の記録をもとに自分なりに考え、新しいことを織り交ぜながら授業を行ってきました。子どもたちが育てた花やグリーンカーテンが学校を飾り、自分たちで使いやすいように設計・製作した掃除用具入れや棚、イスといった作品が学校生活の中で活用されています。また、自分たちで調べたこと、考えたことがwikiサーバーに蓄積され、先輩の資料を見ながら、より使いやすいサイトを構築していく。このような授業での取り組みが、学校の文化として定着して、各教科や総合的な学習の時間、特別活動に生徒会活動とつながり合いながら、学校全体のコミュニティが成熟し、社会とつながっていくという現場に立ち会わせていただき、附属中ならではの教員生活を送らせていただいていると感じてい

ます。

私は、教員になって今までを振り返ると、校務分掌で与えられた役割を、以前の記録や同僚、生徒の意見を聞きながら確実にこなすというスタイルで仕事をしてきました。スクールリーダー養成コースで学んでおられる先生方は、文字通り学校の中堅教員として、学校を牽引し、これからの社会に対応した学校づくりに向けて、改革を進めていこうという信念を持った方ばかりで、大変刺激を受けています。今年は生徒指導部長を拝命しているのですが、社会の流れが変わり、教師の入れ替えが進んでいる中で、本校の先生方やOBの方が附属中の特色が薄れてきているという危機感を抱いています。「自主協同」の校訓のもと、生徒が中心に学校を動かしている学校を発展させていくため、生徒指導という立場で、何ができるかをこの場で考えたいと思っています。

先行きが不透明で混沌とした現代において、学校においても様々な改革の波が押し寄せ、効率を求めるあまり、大切なことがなござりにされている気がしてなりません。学校は学ぶ場であり、子どもにとっては授業が一番大切であるという思いは変わりません。教員生活の折り返しが見えてきた今、教職大学院の皆さんの中で語り、学びながら、目の前の子どもや保護者だけでなく、教師集団や地域、社会に目を向け、少しでも明るい未来を創造できるように、自分ができることを考え、実践を積み重ねていく所存です。これからどうぞよろしくお願ひします。



福井大学教育地域科学部附属特別支援学校

柳澤 秀樹 やなぎさわ ひでき

今年度、福井大学教職大学院教育学研究科教職開発専攻スクールリーダー養成コースに入学しました、柳澤秀樹です。現在、福井大学附属特別支援学校に勤務しています。今年度で、本校に勤務して12年目になります。私の本当の専門教科は理科ですが、どうして特別支援教育に携わるようになったのかを少し長くなりますが、話してみたいと思います。

大学受験では、化石の研究をしたいという夢や坂本龍馬へのあこがれもあり、高知大学理学部地学科（昭和56年度～60年度）を受験し、学生生活を送りました。

卒業後、1年間東京の建設コンサルタント会社に就職し、その東京生活のうち半年間は、北陸、四国、九州の現場を飛行機で飛び回っていました。現場では、トンネルに地滑りの計測器を設置

する仕事に取り組んでいました（昭和61年度）。

自分なりに研究を続けていこうと考えて、理科の教員になろうと決心して1年で会社をやめました。高知大学で理学部、教育学部、農学部の特許生を2年間しながら、中学校と高校の理科の免許状を取得しました（昭和62・63年度）。

平成元年度に福井県の中学校の理科教員として新採用になり、教員生活を歩み始めました（平成元年度～平成4年度）。次に赴任した小学校で、初めて特殊学級（ことばの教室）を担当しました（平成5年度～平成8年度）。1年目は、2名の女子児童（3年生と6年生）を担当し、まず、女子児童との信頼関係を築くことに力を入れましたが、なかなか授業ができず、悩む日も多かったのを覚えています。

2年目に、私が特殊教育で教員人生の後半を過ごそうと決心するきっかけになった女子児童との出会いがありました。その女子児童は口蓋裂のため発音が不明瞭なため、身振り手振りでした。自分の気持ちを伝えられませんが、とても活発で明るい子でした。この女子児童とのコミュニケーションをどのようにしていくかが、とても重要な課題でした。その年、福井県の教員派遣事業で国立特殊教育総合研究所の短期研修情緒障害教育コース（平成6年9月～11月）に参加する機会をいただきました。短期研修では、特殊教育に携わっている先生方と毎日語り合うことができ、とても有意義な時間を過ごすことができました。また、コミュニケーションに関する貴重な研修に参加して、コミュニケーションボードなどの教材を作り、授業に活用しました。この研修では、養護学校教諭2種免許状に必要な単位も取得できましたが、自分の中で通常学級と特殊学級のどちらの道に進むのか迷っていて、免許の申請をためらっていました。特殊学級は4年間担当しましたが、1年生で入学してきた女子児童だけを卒業まで担当することができず、後悔の気持ちを感じていました。

その後、2つの小学校で通常学級（平成9年度～平成12年度）の担任を経験して4年間を過ごしました。この時期に、特殊学級で卒業まで女子児童が、養護学校に入学したという話を聞きました。私の中に、後悔の気持ちが再び思い出され、今後の教員生活を特殊教育の道に進んでいく決心をしました。平成13年度に、特殊教育を勉強し直そう

と福井大学附属養護学校（現在の福井大学附属特別支援学校）に赴任しました。

本校は、「生活教育」を掲げて教育に取り組んでいる学校で、1年目は、小学部に配属になりました。私は3組になり、5年生5名、6年生4名の計9名の児童を4名の教師が担当するティーム・ティーチング体制に驚きました。小学部では、着替え、なかよしタイム、朝の会、個別学習、遊び（運動）、給食、着替えなどの大きな時間の枠が帯取りになっていて、とても衝撃だったことを今でも覚えています。この頃、養護学校教諭2種免許状を申請して取得しました。小学部では、実践事例をまとめると、自分が子どもに対してどんな関わりをしたのか振り返ることができ、勉強になると同じ学級の教師から教えていただきました。これがきっかけで、平成15年度から教育実践総合センターに投稿を始めるようになりました。これは現在も続けています。

平成15年度に中学部に異動になり、現在10年目を迎えています。中学部では、身体や五感を使ってじっくりと物に向き合ったり、人と関わったりしながら、直接体験を多く取り入れて生活を手づくりする「ゆうゆうタイム」に取り組んできました。特に平成20年度からは、「衣食」「工芸」「環境」の3つの異年齢・異能力の縦割りグループで、年間を通して活動しています。また、昨年度まで「自分らしく生きる学びの創造～子どもの成長の道筋を協働でたどる～」をテーマにした4年次の研究に取り組んできました。

今年度は、「生活教育」について研究紀要や年報や40周年記念史などを読んで話し合うことで、新しい研究テーマを時間をかけて模索している段階です。教職大学院では、今までのゆうゆうタイムを中心に積み重ねてきた個人の実践研究を、「協働」を視点に再構成し、理論などを参考にしながらまとめていきたいと考えています。よろしくお願ひします。



福井市中藤小学校

今年度、スクールリーダー養成コースに入学した高間恵美です。昨年度、新校舎開校を控えた中藤小学校に赴任しました。引っ越しの手伝いぐらいなら力になれるかなあとのんきに構えていた私は、校長先生から教職大学院を薦められ、戸惑いました。私はいろいろな実践をするのは大好きで

高間 恵美 たかま めぐみ

すが、いつもやりっ放しで、記録をしたり振り返ってまとめたりするのは大の苦手なのです。こんな私が大学院で学ぶことに決めたくっかけは、「福井大学の免許更新講習が楽しかったのなら、教職大学院はあなたに合っている」という一言でした。おかげさまで、4月、5月の合同カンファレ

ンスでは、違った地域、違った校種の方と大いに語り合っ、楽しく学ぶことができました。

今年度4月より私の生活を大きく変えたのは、教職大学院への入学だけではありませんでした。まさしくスクールリーダーとしての初めての立場が3つも舞い込んできました。2年生4学級の学年主任、同じ学年に新採用の先生がいるので新採用指導担当、そして私の学級に入っているストレートマスターのメンターです。たった3年前は、学年4人の担任の中で一番年下で、自由にのびのび実践し、困ったときは先輩の先生に頼っていた私が、学年をまとめ、後輩を育てる立場になってしまいました。今思えば、教育実習や新採用のときにお世話になった先生のご指導が、その後の私の教員生活に大きく影響しています。責任の重さをひしひしと感じる毎日です。

さて、新中藤小学校開校まで1年を切ってしまいました。本校では、学級や学年を解いた学習集団における授業を試みています。先日の指導主事訪問で、私と新採用の先生で、2学級を解いて新たな集団を2グループ作り、それぞれの教室で活

動するという授業を提案しました。単元は算数の「かくれた数はいくつ」です。学級を解くことで児童の関心・意欲・態度がとても高まり、それによって単元のねらいも十分に達成することができました。今は、生活科で、4学級をといた授業を計画し、大きな効果があると期待しています。これから数多くの新しい実践にチャレンジし、その実践を大学院での学びとかかわらせながら、中藤小学校とともに私も大きく成長できたらと思っています。



福井市中藤小学校

こんにちは。今年度、教職開発専攻スクールリーダー養成コースに入学しました佐野恭子と申します。

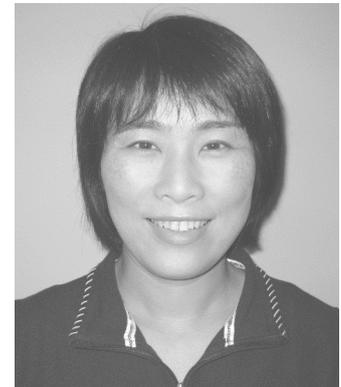
4月から教職大学院の拠点校の1つ福井市の中藤小学校に勤務しています。全校児童が700名を超える大きな学校ですが、縦割り活動の伝統があり、6年生が下級生のお手本となり、学校を引っ張ってくれています。7月には縦割りグループごとにお店を出し合い、全校で楽しむ集会在毎年行われています。また、挨拶運動が盛んで、毎朝委員会や集団登校の班長さんが挨拶たすきリレーをして、「おはようございます」の声を響かせています。大きい学校ながら仲の良さが自慢です。

このような児童の落ち着いた活動を支えているのは、あらためて先生同士の協力なくてはありえないことと痛感しています。活動の中心となる先生は多くの先生方に活動の目的や内容を共通理解してもらうために、きめ細やかに文書や口頭で連絡をしています。それを受けて各担任や担当者は考え、自分の持ち場でできることを進めています。その連携プレーがあって、一つ一つの活動が活発に進んでいくのだと思います。これは、学校現場を離れていたからこそ、今感じていることです。

2年間、教育研究所で今求められる思考・判断・表現力を育む教育について研究する中で、そのためにも先生方同士が協働して研究に取り組む体制づくりが必要だと考えていきました。ちょうど教育研究所内でも各課中心の業務から所全体で

佐野 恭子 さの きょうこ

問題に取り組む協働性が進んでいたことで、学校においても異なる年代や経験の先生方が協働して校内研究を進めることで、学び合う先生方の関係性が生まれていくだろうと思うようになりました。そして、校内研究を先生方と試行錯誤しながら進めたいと強く願ひ、教職大学院への入学を希望し、実現したわけです。



中藤小学校は、現在校舎を移転新築中です。来春広い敷地に低・中・高学年でフロアが分かれた開放感のある学舎が完成します。今以上に互いの学習を見合ったり、一緒に学習したりする機会が増えるに違いありません。学年間を中心に学習を進めると同時に、他学年との学習の可能性を探る必要性があります。その可能性を求めて、今年度はどの学年も、学級・学年をといての学習に取り組んでいます。

このような新しい学校づくりの機会に巡り会えたことを感謝しています。中藤小にある小さな連携プレーを土台に、まずは各学年、低・中・高学年、そして学校全体での研究が進んでいく過程を研究していきたいです。

福井市藤島中学校

今年度よりスクールリーダー養成コースに入学した渡辺裕幸です。担当教科は数学で、部活動は一貫して卓球を指導させていただいております。これまでの自分を振り返ってみると、「このことだけは大事にしてきた」と自信を持って言えるものがなく、その時その時の自分に与えられた役割を懸命に務めてきただけという気がしています。ただ、今の自分に大きな影響を与えた経験があります。2008年の「全国中学校卓球大会」（敦賀市開催）の大会事務局長の仕事を務めたことです。教育委員会・校長会の全面的なバックアップを受け、多くの先生方や協会役員の方々の協力を得て成功裡に大会を終えることができました。自分1人では決して成し遂げることはできなかったことです。多くの協力してくださる方々の「来て良かったと思ってもらえる大会にしよう」という思いを1つにし、「組織」として大会運営を行ったことで初めて成し得たことだと思っています。

その時の充実感がまだ残っている間に、もう1度、みんなをまとめ「組織」として大きな課題に取り組む「マネジメント」の仕事がしたいと考えていました。そのような時に、福井大学教職大学院で学ぶ機会を与えていただきました。

「地域から信頼される学校」づくりのために

渡辺 裕幸 わたなべ ひろゆき

「組織」としてどうしていったらよいか。今、本校が突きつけられている切実なる課題であります。教職大学院での「学び」を生かし、教職員1人ひとりの思いを1つにし、それぞれがバラバラに頑張るのではなく、「組織」としてどのように対応していけばよいかをコーディネートしていくのが、今の私の役目だと考えています。



まだ2回の合同カンファレンスとラウンドテーブルを終えたに過ぎませんが、専門的な知識を得たり、いろいろな分野の方々から刺激をいただいたりすることにワクワクしています。多くの方々に助けをいただきながら過ごす2年間になるかと思いますが、常に「向上心」「誠心誠意」「感謝する心」を忘れずに頑張っていきたいと思えます。どうぞよろしくお願ひします。

福井市灯明寺中学校

教員生活26年目で、新採用の高校（3年間）以外はずっと（鯖江市と福井市の）中学校に勤務（台北日本人学校派遣3年間の2年間は小学部の担任）しています。この経験を生かし「小中高のスムーズな連携」というテーマを持って入学しました。自分の本校での勤務は5年目となり、今年度から研究主任をしております。「心を育てる活動の充実」という中学校区の目標を踏まえ、小中連携しながら教師と生徒がともに成長できるような活動にしていきたいと考えています。新カリキュラムの実施に伴う年度、自分自身本校では今まで研究（ましてや道徳）とは無縁の校務分掌にいたことや、学校ごとに異なる校風、現状などしほりも多いなかで、研究の進め方を同僚とともに日々悪戦苦闘しながら模索しているところです。しかし仕事上の悩みも教職大学院でのクロスセッション（教授陣も交えた4~5人のグループで互いの現状や問題点を伝え、討議する）などで自分の行ってきた実践内容を他の先生方に伝える活動を通して客観的に自己を見つめ、次へのエネルギーにしています。また、終了後にレポートを書くこと

佐々木 徳之 ささき のりゆき

で、受けたアドバイスや他の方の発表から学んだことを整理し、自分の学びをより明確にすることができます。そしてそこで得たことを本校の研究の副題「生徒も教師も共に成長してゆける学校を目指して」のように先生達1人ひとりの力を組織に生かし、先生達と生徒達が双方ともにやってよかったと思える活動にしてゆける学校づくりに最大限に活かすことを目指しています。



何より私自身が与えられた学級(学年)と部活動と校務分掌など目の前の仕事を精いっぱい行うといった視点から、先生方の力を学校全体の組織の力にどう生かすかという視点で考えるようになってきたのが今の立場の最大の成果です。また、入学ガイダンスで言われた「福井大学の学生である

こと」を生かして、大学内におられる教授陣に個人的な教育や教科の方向性などの質問にも気安く相談に乗っていただけたところもこの大学院の良いところです。今までの自分が抱いていた「なんとなく疑問に思っていたけど、誰にも聞けなかった質問」の相談や資料の所在によって「腑に落ちた」経験をさせていただきました。

本校のような拠点校でない一般の学校でも教職大学院の学びを取り入れていくには様々な障害と限界があるかもしれません。しかし「事件は会議室にあるのではなく現場にあるんだ」という映画のキャッチフレーズのように、灯明寺中学校という一般的な学校で現場の教師の抱えた問題やともにビルトアップしていくなかで得た成果や体験

は、他の学校にも生きてくるのではないかと思います。教職大学院に昨年まで在籍していた先輩とともに動き始めた「日々体験しながら学び、学びを現場に活かす」活動は自分が引き継ぎ、これで3年目に入ります。継続は力。自分自身も始まってまだ2か月です。3年担任とあわせ、こういった学びをしていくのは大変忙しいですが、充実しています。教職大学院の先生方、共に学ぶ院生の方々、そして本校をはじめとする現場のたくさんの方々の仲間達の理解と励まし...に支えながら学ばせていただいていることに感謝し、今後も夢と目標をもって学んでいきます。よろしくお祈りします。

福井市安居中学校

本年度より福井大学教職大学院スクールリーダー養成コースでお世話になります。福井市安居中学校の加藤学です。私が勤務する安居中学校は、福井市の西端に位置し、市街地から約10kmの自然が多く残された地域にあります。全校生徒は102名、5学級編成の小規模校です。今年4月に福井市で2校目、県で3校目の教科センター方式の学校として移転開校を迎えました。現在、安居中学校では、「社会参画型学力の育成」を研究テーマとし、生徒が主体的に参画する学校づくりを進めています。

大学院の先生方を招いた研究会を経て、「生徒を学校づくりに参画させていく」という安居中学校の学校づくりの方向性に辿りついたのは、開校まで1年を切った昨年夏でした。「社会参画型学力の育成」という安居中学校の柱が見えてきたのも、同じくこの頃でした。まず、最初に取り組んだことは、子どもたちが学校づくりに参画する仕組みを考えることでした。生徒会での活動を活かし、各委員会を通し生徒が学校づくりに参画していく計画を進め、各委員会の活動計画に「(新)安居中学校づくり」に関わる活動が計画されました。平行して他校との交流活動も動き始めました。教科センター方式の先進校である至民中学校の研究発表会に、本校の生徒会役員の生徒たちも参加し「生徒集会」を見学しました。これらの活動が子どもたちの意識を大きく変化させるきっかけとなり、「生徒との協働で行う学校づくり」は一気に前進することになりました。子どもたちの中に「学校を自分たちの手でつくっていく」とい

加藤 学 かとう まなぶ

う考えが芽生え、生徒会を中心に生徒たちと新しい安居中学校のあり方を考えながら、学校づくりを進めていくことができました。開校を1ヶ月後に控えた3月には、他校から見学にくられた先生方に対し、生徒が自分の言葉で「(新)安居中学校」を語り、新しい校舎を案内してまわられるようになるまで、子どもたちの学校への意識は高まりました。



開校から2ヶ月が経過しました。子どもたちの新校舎での活動の様子は、私が開校前に想像していた以上に前向きで、学習、生活どちらの面でも高い意欲が感じられます。この後、子どもたちが新しい校舎でどのように「学び」と向きあい、「学び」を深めていくのか。これが、私が教職大学院で研究を進めていくテーマです。「社会参画型学力の育成」を目指した「安居中学校での学び」を子どもたちと共につくりあげていく中で、私自身も、学ぶことの「価値」と「意味」を再発見していきたいと考えています。どうぞよろしくお祈りいたします。

開校から2ヶ月が経過しました。子どもたちの新校舎での活動の様子は、私が開校前に想像していた以上に前向きで、学習、生活どちらの面でも高い意欲が感じられます。この後、子どもたちが新しい校舎でどのように「学び」と向きあい、「学び」を深めていくのか。これが、私が教職大学院で研究を進めていくテーマです。「社会参画型学力の育成」を目指した「安居中学校での学び」を子どもたちと共につくりあげていく中で、私自身も、学ぶことの「価値」と「意味」を再発見していきたいと考えています。どうぞよろしくお祈りいたします。

福井県立武生東高等学校

野坂 智裕 のさか ともひろ

皆さんこんにちは。今年度、教職大学院に入学した野坂です。2年間よろしくお願ひします。今まで2回のカンファレンスに参加いたしました。が、どちらも対話をする事の大切さと、それがもたらす力について考えさせられるものでした。特に感心したのは、皆さんの聞く姿勢がすばらしいということです。職業柄、様々な場面で我々は、話すことばかりに気をとられてしまう傾向がありますが、多くの実践や思いを聞くことが、新たな発見をしたり時間をかけてそれを自分の中で醸成させ実践に役立てる出発点になるのだということ、今回改めて感じる事ができました。また、どちらかという話し下手な私が自分の考えを話すことができ、曖昧だった思いを形にすることができたのも、真摯に耳を傾けてくれる方々がいてくださったおかげだと思ひました。こういった双方向性について考えると、自分が20代だった頃、先輩の先生方との雑談を通してたくさんの学びがあったことを思ひ出します。仕事仲間との「雑談クラブ」結成を考えていらっしやる先生の発表もありましたが、とても共感いたしました。また修了された先生の論文を読ませていただく機会もあり、悩みなながらも「協働」というテーマを一貫して求め続けた姿に深い感動を覚えました。そして結果がどうであれ、自分の目指すものに向かって進んでいくことこそが重要であることに気づきました。

私は現在、武生東高校に勤務しており、昨年度まで国際科の担任をしていました。国際科は海外留学・ホストファミリーをはじめとする多くのイベントが用意されており、希望すれば無理なく新

鮮な経験をする事ができます。また、独自のカリキュラムをもとに、生徒が様々な場面で活躍できるシステムが構築されています。これらの力で生徒が大きく成長する姿を間近に見ることができ、大変貴重な経験をさせてもらいました。私の担当教科は国語で、

たまたま前任校で研究発表をする機会があり、「生徒が主体的に参加し、学力を向上させていく授業を考える」というテーマで半年間研究しました。このときの実践と国際科の英語の授業には、ペアトークやグループ討論、またディベートなど共有できる手法が数多くあります。もちろんそれだけではなく反復演習を通して語彙を増やし、豊かに表現できる能力や、文章を的確に理解できる能力の向上を目指すことがベースとしてある点も同様です。新しい学習指導要領では「すべての教科の言語活動の充実」が大きな特色として示されています。様々な校種の先生方や大学院の先生方の力をお借りしながら、新しい授業の形を少しずつ模索すると同時に、生徒指導や学校行事など幅広い分野の話題を共有していけたら幸いです。



福井大学教育地域科学部附属小学校

青木 美恵 あおき みえ

今年度、教職大学院スクールリーダーコースに入学した青木美恵です。

教員生活が15年を経過した昨年、現在勤務する附属小学校に異動しました。「学ぶ意欲」旺盛の子どもたちと共に「学ぶおもしろさ」を感じながら過ごす毎日です。

平成7年、大学院を修了し、私が初めて赴任した学校は、青葉山の中腹にある高浜町神野小学校でした。海美しく、山の幸あふれ、自然と共に力強く生きる人々の中で、子どもたちは生き生きと生きていました。その豊かな生活の中には、様々な学びが散らばっていました。その1つひとつを子どもたちと共に紡ぎながら、「生活に根ざした学び」を展開することができました。

その後、福井市殿下小学校でお世話になりました。殿下校も地域力あふれる学校でした。学校は

地域コミュニティの中心であり、子どもたちは地域の宝として大切に育てられていました。そして、幼小中の子どもたちと先生方がそろこの学校では、就学前から、義務教育修了までの12年間の「学びのつながり」について考え、実践することができました。

これまでの教員生活をふり返ると、これまで出会ったお一人おひとりの顔が浮かび、この原稿を書いている今でも涙が出てきます。かわいくて素



直な子どもたちと共に学ぶことのできた幸せ、心あたたかく素敵な先生方に育てていただき、懐深い地域の人々に支えていただいた感謝の思いで心がいっぱいになります。これまで、「子どもと共に成長し、学び続ける教師でありたい」という思いを大切に生きることができたのも、出会った人々のおかげだったと改めて感謝するばかりです。

そして、今もなお、附属小学校のみなさんに支えられながら生きています。思い悩んでいる私の話に耳を傾けてくださる先生方、授業づくりに知恵をかせてくださる先生方、語り合うことのできる先生方のおかげで、なんとか前に進むことができています私…です。

この春から私は、本校の研究部に所属しています。「協働して学びを深める授業をつくる」というテーマで研究を進めていますが、これまでの研究の歩みや先生方の実践を読み解き、「協働」による「学びの深まり」とはどのようなことなのかを自分自身が実践しながら考えていきたいと思ひます。

またメンター教員の仕事を与えられ、インターンの学生さんが週3日、私のクラスに入り学ぶことになりました。彼は、私の毎時間の授業を参観し、感じたことや考えたことを加え授業記録として、私に返してくれます。私は、この記録を読み、返事を書くのですが、そこで明らかになるのは、子どもと向き合う中で自分が大事にしていること、授業をつくる中で自分が大切にしていること、それらの意味、そのつながり…など自分自身のありようです。最初は気分も重く、戸惑っていた私ですが、今は、「学び合い、共に伸びよう」と思っています。

教職大学院には、「学び続ける教師でありたい」という思いで入学しましたが、「学び続ける」ためには、これまでの自分を見つめ直し、どうこれからの自分につなげていくのかを考えていくことが必要なことに気付かされました。学校を中心として、自分自身が所属するいくつかのコミュニティでの自分自身の役割を考えながら、自分自身をとらえ直し、新しい一歩を踏み出す機会にしたいです。



事前説明会	平成24年7月7日(土) 13:00-17:00 文京キャンパス総合研究棟 I 13階会議室
出願期間	9月6日(木)~11日(火) 最終日17:00まで
ガイダンス	9月15日(土) 10:00-12:00 文京キャンパス総合研究棟 V 6階
選抜期日	9月22日(土・祝) 9:00-10:30 専門科目A 学校改革実践研究の基礎 11:00-12:30 専門科目B 教育実践の分析 13:30- 口述試験
合格者発表	10月2日(火)
入学手続き	12月10日(月)~13日(木)

入試についてのお問い合わせは、〒910-8507 福井市文京3-9-1 福井大学学務部入試課
TEL 0776-27-9927 E-mail: g-nyusi@ad.u-fukui.ac.jp

Fukui Round Tables: Summer Sessions 2012
For Reflective Practice, Organizational Learning, and
Reflective Institutions of Teacher Professional Development

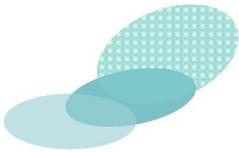
実践し 省察する コミュニティ

2012.6.23-24

福井大学教育地域科学部 1号館・共用講義棟

主催: 福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)
後援: 福井県教育委員会・(財)福井観光コンベンションビューロー
共催: 福井大学高等教育推進センター・教育地域科学部附属地域共生プロジェクトセンター・教育実践研究フォーラム・社会教育実践研究フォーラム・福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」実行委員会・日本社会教育学会東海北陸6月集会実行委員会

For Communities of Practice and Reflection



2012年6月23日(土)、24日(日)の2日間に渡り、福井大学ラウンドテーブル サマーセッションが開催されます。ここでは、23日(土)「専門職として学び合うコミュニティを培う 日本の教師教育改革のための福井会議2012」で開かれるフォーラムにおける4つのZoneのねらい、報告校、シンポジウムの内容および24日(日)「実践研究福井ラウンドテーブル2012」の概要を掲載いたします。

6/23 Sat. 12:40-17:40

専門職として学び合うコミュニティを培う

For Professional learning communities

日本の教師教育改革のための福井会議2012

Zone A 学校：子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ/学校を変える力

知識社会の学校において、教師たちはいかにしてそれぞれの自律性に基づきながら学校づくり・授業づくりを進めていくのだろうか。そして、教師たちは学校を「学習する組織」として位置づけ、同僚性を育みながら協働実践研究を展開することで、いかにして子どもたちの学び合うコミュニティ、ケアし合うコミュニティを支えていくのだろうか。Zone Aでは、知識社会のための学校づくり、さらには、知識社会を超えた学校づくりの方向性を探るために、以下3つのSession から多角的に議論を進めていきます。特に、今回のシンポジウム、フォーラムでは、高校教育における学校改革、授業改革の実践事例を手がかりに議論を広げ深めていきたいと考えています。

Session Iでは、福井県内外の小学校・中学校・高校・特別支援学校から、学校拠点の協働研究に関するポスター報告が行われます。ポスター報告にもとづき、各校及び参加者で互いの実践を交流します。

Session IIシンポジウム：「学校を変える力」では、早稲田大学・教授の菊地栄治氏、大阪府立富田林高等学校・校長（前大阪府立松原高等学校・校長）の易寿也氏、山梨県立塩山高等学校・教諭の廣瀬志保氏をお招きし、高校教育における学校改革・授業改革の展開について御報告と御意見をいただきます。そして、シンポジウムによる報告、意見を受け、小学校・中学校・高校・特別支援学校に共通する学校づくりの理念や方向性について、参加者の皆様と共に議論を深めていきます。

Session IIIフォーラム：「ケアし学び続けるコミュニティ/高校改革のプロセスを探る」では、先の2つのSessionを受け、学校改革・授業改革に挑戦している福井県内外の小学校・中学校・高校・特別支援学校から協働研究の具体的な報告をしていただきます。このSessionで学校における協働研究の展開を報告いただくのは、小学校2校、中学校2校、高校6校、特別支援学校1校で、クロス・フォーラムを設けて各学校の挑戦を傾聴し、議論し、共有していきます。

- ①「ケアし学び続けるコミュニティ」
 - 愛育養護学校（東京） 福井市至民中学校（福井）
 - 富山市立堀川小学校（富山） 若狭町立みそみ小学校（福井）
 - 福井大学教育地域科学部附属中学校（福井）
- ②「高校改革のプロセスを探る」
 - 富士市立高等学校（静岡） 大阪府立松原高等学校（大阪）
 - 山梨県立塩山高等学校（山梨） 金沢大学附属高等学校（石川）
 - 福井県立若狭高等学校（福井） 啓新高等学校（福井）

Zone B 教師教育：教師教育改革のための協働組織の形成

Session I ポスターセッション

中教審「教員の資質能力向上特別部会」審議のまとめに見る教師教育改革の動向
 福井県教育委員会と連携した福井大学教員免許状更新講習必修講習の独自の取組
 福井県教育研究所における福井大学と連携したミドルリーダー研修
 福井県特別支援教育センターにおける福井大学と連携したミドルリーダー研修
 福井県教育庁嶺南教育事務所における福井大学と連携した内地留学研修の改革

Session II シンポジウム

中央教育審議会・教員の資質能力向上特別部会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（審議のまとめ）」は教員養成系学部・大学の将来をどのように描こうとしているのか

コーディネータ	松木 健一（福井大学）
シンポジスト	村山 紀昭（元北海道教育大学長）
シンポジスト	加治佐哲也（兵庫教育大学長）
コメンテータ	鍋島 豊（文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室長）

Session III 基調報告とグループ協議によるフォーラム

(1) 基調報告 日向 信和（文部科学省初等中等教育局教員免許企画室長）

「中教審 審議のまとめは教員の養成と研修をどう変えるのか
 ～教員養成，初任者研修，更新講習，教員派遣研修のあり方をめぐって～」

(2) グループ協議

「学校・教育委員会・大学の連携による教員研修」・
 「教員研修と大学院教育の連携」に向けた今後の具体的な構想について

（参加予定機関）

福井県教育委員会・和歌山県教育委員会・横浜市教育委員会・板橋区教育委員会・宇都宮大学・神奈川大学・北海道大学

（調整中）

上越教育大学・静岡大学・和歌山大学・関西学院大学・東北大学・お茶の水女子大学・奈良女子大学

Zone C コミュニティ：持続可能なコミュニティをコーディネートする

3月のラウンドテーブルに引き続き、Zone Cでは「学び合うコミュニティを培う」をテーマに掲げ、地域の自治と学習の拠点である公民館を支えている皆さん、そして、地域活動に積極的に参画している若い世代が集い、互いの実践とそれを支える営みについて語り合い、聴き合います。社会教育の担い手のための福井大学公開講座「学び合うコミュニティを培う」・福井大学地域共生プロジェクトセンター・教育地域科学部で地域に開かれた活動・研究を展開しているメンバーが中心となって準備を進めてきました。

Session I では、互いの活動をポスターを通じて共有します（2階ロビーが会場です）。

Session II のシンポジウムでは、長きにわたって福井市の公民館で地域住民の主體的な活動を支えてこられた公民館主事、地域や子どもの学びに主體的に関わりながら、自分たちの取り組みを持続的に展開しようと模索してきた学生、そして、大学という場でその両者の力量形成を支えようと試みてきた大学教員に登壇していただき、「持続可能なコミュニティのコーディネートする」という視点から、特に世代のサイクルを展開していく中でのコーディネーターの役割について議論の方向性を共有していきます。

Session III では、シンポジウムでの問題提起を受けて、6人程度の小グループを組み、互いの地域活動を紹介し合いながら、あらためて「持続可能なコミュニティをコーディネートする」、その営みと意味を探っていきます。なお、今回のZone Cは、2012年度日本社会教育学会東海・北陸地区社会教育研究集会との共同開催になっております。

Zone D 教科：教科を問い直す／なぜ学ぶのか

学校で学ぶ子どもたちは、固有の目標や内容を判然ともつ教科学習から、知識・技能・思考・判断・表現といった様々な学力を身に付けます。しかし、個別の教科においてに培われてきた学力は、子どもたちの成長発達を支えていく根幹として、どのように統合されているのでしょうか。

前回3月のラウンドテーブルで立ち上げられたZone D：教科の存在意義は、教科の立場から「教科を問い直す／なぜ学ぶのか」という根源的な「問い」を提起している点にあります。私たちは、どのように子どもたちの持っている可能性を引き出し高めていけるでしょうか。子どもの側からの「なぜ教科を学ぶのか」という素朴な視点を大切にしながら、次の3つのSessionから教科を問い直していきたいと考えています。

Session I では、福井県内外の小学校・中学校における授業実践のポスター報告が、子どもの学びから教科を問い直す契機となることを期待しています。

Session II では、富山市立堀川小学校における実践研究を報告していただき、「教科を超えて教科を学ぶ」可能性について、参加者の皆様と共に議論を深めていきます。

報告者：坂井 政信・柴山 秀範（堀川小学校） 司会：松本 謙一（富山大学）

Session III では、先の2つのSessionを受け、「教科で自己を問えるのか」と「教科で日常を問えるのか」という2つのテーマを掲げ、それぞれのテーマごとのフォーラムを設けて、教科の学びについて問い直しを図ります。

【国語】実践報告者：小島 優子（福井市円山小学校） 課題提案者：三好修一郎（福井大学）

【理科】実践報告者：竹澤 宏保（福井県教育委員会） 課題提案者：石井 恭子（福井大学）

6/24 San. 8:30-14:00

実践研究福井ラウンドテーブル2012

Summer Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていききたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていききたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

Schedule

6/23 sat - 24 sun 福井ラウンドテーブル サマーセッション

7/7 sat 7月合同カンファレンス

7/14 sat 7月合同カンファレンス予備日

7/23 mon - 25 wed 夏の集中講座(1a)

7/26 thu - 28 sat 夏の集中講座(1b)

7/30 mon - 8/1 wed 夏の集中講座(2a)

8/2 thu - 8/4 sat 夏の集中講座(2b)

[編集後記]

いよいよ今年度もラウンドテーブルの開催を迎えました。巻頭言に寄せていただいたように、中教審特別部会をめぐる動向、そして、そこでの大学の役割が大きく見直されていく中で、今後の展望を拓く重要な集まりの1つになっていくものと思われまふ。各地で積み重ねられてきた豊かな実践を互いに交流・共有し、長期にわたる実践と制度の展望を探っていく中で、どのような方向性が生まれていくのか、しっかりと学んでいきたいと思ひます。次号は、ラウンドテーブルの実際の様子をお届けいたします。(S)

教職大学院Newsletter **No.44**

2012.06.23発行

2012.06.23印刷

編集・発行・印刷
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院Newsletter 編集委員会
〒910-8507 福井市文京3-9-1